

『私の人生 その六』

日本を美しくする会
相談役 鍵山秀三郎

高額な土地を売ってもらったきっかけは

直接のきっかけは、そこはもの凄い広い庭なんですね。その庭にはツツジがありまして、花が咲き終わった後、花を摘んでおくと翌年もきれいに咲くんです。ところが放っておくと実がなってそこにエネルギーが行っちゃうんです。そうしますと年々ツツジの木は弱っていくんです。ということは、やれとは言われないんですが、そうすると良いな・・・と家内が聞いてきたんです。私と家内と二人でやりました。もしか私が期待したら、そんなことをできないですね。自分の期待が叶えられるわけじゃないですから。人はAをやればBになるとわかっていることはみんなやりやすよね。ところがAをやって、Bになるのか、Cになるのか、Dになるのかわからないとやらない。私はAのことが何に繋がるかは期待しないです。やることは良いことには違いないから、やるんですね。何かを期待すると、期待通りにならないかっただけにはできないですね。私の場合、全く期待なしにやったのか？と言いますと、期待が遠くの方にあるわけですし、これをやったらこうなるんじゃない、Aをやったらイロハのイになるかもしれない、とんでもない、しかし必ず良いことに繋がる。そういう期待はありましたね。二宮尊徳翁が目先のことを期待してはいけない、長期的な期待をせよと教えておられますけど、まさにそうで、私は遠くの方に期待を置いたんです。そうしますと、私のやっていることは、糠に釘ということがありますが、それどころじゃない、空中に釘を打つんです。誰からも理解されない。ところが空中に打った釘が止まるんですね。最初は点だったものが線になって、面になって

繋がってきた。そのことを中国の教えで「十年偉大なり、十年間心を込めてやると偉大な力になる。」「二十年恐るべし、二十年やると恐るべき力になる。」「三十年にして歴史なる、一つの歴史といえる。」私の場合はまさにこの中国の格言通りになっているんです。十年経ったら、社員の人々が命令されなくてもやるようになった。二十年経ったらほとんどの人がやる。三十年経ったら社外から掃除を教えてくれと頼まれるようになった。

業績はどのようになり推移してきましたか？

右肩上がり一辺倒できたわけではないですね。まず最初は細々とした小売店に対する卸業、零細な一軒一軒に数千円、ちよつと大きくても五万円とかの請求書を出して、やがては小売店に卸をする卸業者に卸をするという商品を独自開発したり、メーカーさんに作ってもらったり、そういうことができるようになったんです。やがてそれが主流になってきたんですけども、残念ながらこの業界は簡単に始めて簡単に潰れるんです。そういうことが多かったです。そこで昭和44年からですけども、ビッグストアが店舗展開する中にカー用品も入りたいということで、私どももそれに入らせてもらいました。非常に調子よく行きました。しかし、ビッグストアの商売の仕方を見ると、商人としては決して良いやり方ではないと思っただけです。そこで決別をして、今度は卸業から小売業に転換して、51年から始めて53年頃に転換し終えました。しかし、その昭和51年当時、年商が51億円というときに約29億円、60%占めていた取引を辞めるわけですから、これは会社の浮沈を賭けた生き方、よく人から「それは背水の陣ですね」と言われたんですね。背水の陣ではなく、水中の陣でした。鼻の下まで水が来ていて、一歩も下がれない。一歩下がったら息ができない。息するのがやつとの状態でした。

便教会新聞

第138号

平成30年8月

会日 26日
総回 18回
教日 25日
便日 8日

便教会は、教師の教師による教師のためのトイレ掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手法ではない、ただ身を低くして実践あるのみ」の教育方針で、自らの人格を高めることを目的としています。

便教会新聞発行責任者 高野修滋
〒445-0802 愛知県西尾市米津町天竺桂二七
TEL 056-3156143 056-3156144
携帯 090-4215-1727

『先施』

愛媛便教会世話人
新居浜市立角野小学校
教諭 眞鍋 裕介

11年前、愛知県東海市立富木島中学校で教師の人生を歩み始めました。恥ずかしながら、本来自分はプライドが高く傲慢で、謙虚ではありません。教師初任の年、その自分の弱さと未熟さで学級崩壊に近い状態にしてしまいました。生徒との関係は最悪、スタートを切ります。その状態から救ってくれたのが掃除でした。そして、これからの日本を創る子どもたちを育てるという、教師の仕事の大切さを晴らしさに気付かせてくれたのも掃除でした。

結婚を機に故郷、愛媛に戻りました。紆余曲折ありましたが、平成29年3月19日、愛媛便教会を立ち上げ、活動回数は18回となりました。多くの出逢いが感動を生み、感謝の心を育み、活動を支えてくれます。また続けることで課題が生まれ、それに向き合うことで新たな展望が見えてきました。

「愛媛便教会1年半を振り返って」

多くの方に支えられスタートした愛媛便教会は、毎月1回勤務校である角野小学校のトイレを掃除しています。はじめは家族3人で行っていた便教会ですが、新居浜市立泉川中学校の越智誠司先生と、(株)ザ・ワークスの金本瑞樹さ

んとのご縁によって発展しています。このお二人との出逢いは、『人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に。』という言葉そのものです。トイレ掃除を続けていると、そのとき、自分に必要不可欠な出逢いがあります。

越智先生は第3回の愛媛便教会から参加して下さいました。私たちと出逢う前から掃除を大切にされていて、毎朝欠かさず生徒と一緒に清掃活動をされています。忙しい部活の合間をぬって、時には同僚の先生と、時には生徒と一緒に参加して下さいました。心が強く、目の前の子どもたちを大切にされていて、心から教師として尊敬できる方です。

金本さんは、日本を美しくする会の四国ブロック大会でご縁をいただきました。金本さんも職場でトイレ掃除を続けられてきた方で、フットワークがよく、細かなネットワークで同僚を誘ってくださり参加人数が増え、活動の勢いが増しました。参加者の中に、角野小学校の児童と保護者、卒業生がいたことが何よりも嬉しかったです。温かい心とリーダー力で、一緒に掃除をする心強い方です。

お二人の心、言動にいつも感心しています。志を一緒にして活動できることを感謝しています。このような尊敬できる同志に出逢えたのも、この愛媛便教会を立ち上げたからこそだと実感しました。この1年半の実践で教師、児童、生徒、保護

【編集後記】「広げる」ではなく「広がる」

が大事なんだとよく言われ、「そうだな・・・」と頷くものの、胸の内に燃えるものがあって、そこから沸き上がる力、広がってほしいという願い、実践がないと広がっていかないだろうと思っただけです。「きれいを広げる」と同じように掃除の種まきをして、多くの人に掃除の素晴らしい力を実感してもらいたいと思っています。今までどれだけの人に声をかけ一緒に掃除をしたかはわかりませんが、どうしても次の世代、若者、若い先生に掃除の魅力を伝え、育てて行って欲しいと心から願っている。断られても、相手にされなくても試行錯誤しながら働きかけをします。なぜ、徒勞と思われがちなのに熱心になれるかという点、掃除で救われた生徒、先生、学校を目の当たりにして、そのビフォー、アフターの差の大きさに驚くからです。みんな歓喜の表情で水を得た魚のようにいきいきします。そんなときは、掃除をやって良かった、発信して良かったと心底うれしいです。今年の便教会総会もとってもうれしいことがあります。大学生の参加が多くなったこと、若い先生方の初参加が私にとっては大きな、大きな喜びです。これが実現するまでには、ご縁の繋がりがありません。どこか一カ所でも切れていたなら、大学生の参加はなかったかもしれません。この繋がりが、ネットワークを育てていく、つまり日々の想いと行動そのものが大切で、その微差僅差を積み重ねていくことでは無限大に広くなります。行動・実践を足元から少しずつ広げていくことが便教会活動です。第18回便教会総会が実りある会となるようがんばります。

便教会世話人 高野修滋

「えひめ掃除に学ぶ会」

愛媛便教会にとって欠かせない存在が「えひめ掃除に学ぶ会」です。立ち上げの際に、ご迷惑もおかけしましたが、18年続く「えひめ掃除に学ぶ会」に学ばせていただきながら、ともに歩み愛媛県全体に活動を広げていきたいという思いは変わらず、月1回の活動に必ず参加させていたいただいています。えひめ掃除に学ぶ会は子どもたちがたくさん参加します。小学校6年生のある女の子は小学校入学以前からの参加でベテランです。その子がグループリーダーをし、サブリーダーのお父さんに助けてもらいながらも、道具のチェックや時間配分、最初と最後の挨拶まで全部やります。年下の女の子がはじめて参加した時、恥ずかしくてお父さんの後ろにくっついていました。お掃除が始まってからも離れ

ようとしませんでした。そのとき、その6年生

の女の子が「一緒にやろう、おいで。」と声を掛けて手をつないでいきました。そして一緒に水澆しをやったんです。お父さんから離れて一所懸命磨いているんです。グループの反省会で、小さな女の子は恥ずかしそうに笑って「おそうじがんばりました」と言いました。感動しました。子どもの力はすごい。掃除がその小さな女の子の心を開きました。6年生の女の子に学ばせてもらいました。

今年の4月、参加し続けて1年経った時、えひめ掃除に学ぶ会のご厚意で掃除道具を1セットいただけた。愛媛便教会の活動を理解して下さり、認めていただけたのだと感じました。同じ方向を向いても歩み、愛媛県全体をきれいにする活動を広げていけるのだと思うと、とても嬉しかったです。有難うございます。

【課題】

愛媛便教会を立ち上げ、やってみてわかること、続けると気づくことが増えてきました。その中には反省と課題があります。向き合って解決していく過程が愛媛便教会の成長、進化、進歩です。一つ目は「計画力」です。毎月実施することは決まっていますが、第何週の何曜日と決めてはいません。私たちの都合で日程を決定してメールを送っています。その連絡が直前になることもありました。たくさんの方に参加していたためにも、しっかりと計画を立て、連絡を怠らないようにします。二つ目は「慣れ」です。毎月2回（便教会＋掃除に学ぶ会）行っている、「慣れ」が出ている自分がいました。ある時、初めての方が私の隣で試行錯誤しながら掃除をしているとき、「この汚れは取れる、この汚れは取れない」と経験で判断し、上から目線になっていました。一所懸命に取り組むこと

生徒会に入って生徒会長となり自分に付加価値を付けたが、頭がよくなるわけでもなく、自己肯定感が湧かなかった。僕は何をしてもだめで、うまくいかないんだ、と思うようになった。大学受験を迎え、「将来何になりたいか」と考えたとき、小学生のころから褒められたかった、認めてほしかった。先生 になろうと思った。

3年生の秋、授業後の廊下を歩いていると、トイレの前にブルーシート、その上に整列された道具。中の様子をのぞくと、前年、英語を教えてくれた高野先生が同級生と小便器に向き合っていて熱心に掃除をしていた。「今はトイレ使えないよ。他のところ行って。」高野先生は忙しそうにそう言った。大学受験の勉強から逃れたくて、「僕にも手伝わせて下さい。」そう言った。それから、毎週水曜日の後は学校のトイレを掃除した。勉強がうまくいかない中、唯一の温もりだった。トイレ掃除は一回で2時間くらいかかるが、その間は勉強のことを考えなくていいし、いいことをしているという意識が自己肯定感となった。大学は九州の大学に進学した。大学生活も半分が過ぎたころ、高野先生から「今年、長崎でお掃除しましょう。」と突然連絡が入った。今さらトイレ掃除なんて・・・と思った。でもせっかく高野先生が来てくれるなら、そう思って友達と一緒に参加することにした。「初めてトイレ掃除をする人が多いから、場合くんが掃除の仕方教えてあげてね。」高野先生にそう言われると、急に焦った。2年以上のプランクがあったからだ。便器の前で説明をしながら実践すると、みんな同じように真剣に取り組んでくれた。言葉だけでなく、範を垂れることがいかに大切であるか学んだ瞬間だった。子どもたちに気を配りながら僕も久しぶりのトイレ掃除を楽しんだ。高野先生がいつも言うように、掃除が終わると

が大事であり、いつの間にか結果に重きを置いていました。「初心忘るべからず」です。三つ目は「リーダー」です。参加して下さる人や先生に感動してもらいたい。実際にリーダーの声掛けや行動で、その日の学びや感動、グループの雰囲気が変わると感じたことがあります。もっと学ばなければいけないと感じています。さらに、人数が増えてくることも考えて、自分たち以外のリーダーを育てることの必要性も感じています。四つ目は「道具の管理」です。道具の管理はとても悩んでいます。人数が増えて、チームできき、皆さんの笑顔が見られるのはとても嬉しいのですが、トイレ掃除が終わって帰ってからのもう一勝負に心が負けそうになる時があります。道具を準備して下さる人がいることの有難さを身に染みて感じています。今はタオルを洗って下さる方のご協力で大変助かっています。

「愛媛便教会が目指すもの」

これからの愛媛便教会活動が地域に根ざして学校や町、地域を大切にすることを育ていく一助となることを願っています。11年前に勤務していた学校は愛知県東海市にあり、儒学者細井平洲先生誕生の地であります。『先施』、先（ま）ず施（ほどこ）すという教えがあります。相手からの働き掛けを待つのではなく、自分の方から働き掛けなければいけない。自らの働き掛けが、人の心を動かす。特に上下の関係にあっては、上に立つ方から、進んで働き掛けることが大切であるという考えです。まず、私が率先垂範し、参加者のみなさんに「参加して良かった、また参加したい」と喜んでもらえるようにがんばっていきます。小さな灯火ではありますが、四国4県すべてに便教会が立ち上がるように働きかけをしていきます。

参加したみんなの顔が一層明るくなることを初めて実感した。掃除後、懐かしい気持ちになった。大学生になって、新しい土地で一人暮らしをして、別人になったような気でした。しかし、高校から続けていたトイレ掃除を久しぶりに行って、原点に立ち戻った気がした。少し中だるみしていた自身の生活を引き締め、自分が何をしに九州まで来たのか、振り返るいきっかけになった。初心を思い出し、講義も出席するだけではなく、真面目に取り組んだ。結果は実り、3年生では学科の成績優秀者に選ばれ、大学から表彰された。この知らせは遠くの親にも届き、とても喜んでくれたのが嬉しかった。

大学時代のトイレ掃除はこの回を含めて九州で3回、長期休暇で地元へ帰省したときに2回、その中でも平成27年6月から、地元の西尾駅を月に一回掃除する活動が始まった。今も拡大しながら3年以上続いているこの会の初回に参加できたことはとても光栄だ。

大学卒業後は、実家に戻り高校の非常勤講師として働くことになった。大学では座学ばかりで、自分で授業を組み立てて、生徒を前にして50分授業することに不安しか感じなかった。若さだけが取り柄で、生徒との距離は比較的近かったが、授業になると退屈そうな顔をしている生徒に日々申し訳なさを感じていた。「自分は教師に向いていない」「何度もそう思った。週末、月に一回ではあるが、先述した西尾駅のトイレ掃除になるべく参加した。朝も早く、面倒だと思ふこともあったが、何より僕が行くと高野先生が喜んでくれて、一緒に掃除する地元の人たちも温かく迎えてくれるのがうれしかった。次第に掃除する駅が1つ増え、地元の観光名所にも手を伸ばすようになり、にしお市民活動センターに「西尾を美しくする会」として登録、新

『たゆたえども、沈まず』

愛知県立豊田工業高校
講師 場谷 翔汰

僕はまだ何も成し遂げていない。そして、何か成し遂げたいという意欲も薄い。現代の若者によくあるアパシー（無気力）というやつだろうか。授業で教えていた内容である。生徒たちにはアパシーに陥ったときはどうするべきか、「自分に対する肯定感（自尊心）」をもち、社会化していくことが重要」と板書した。「肯定感」というのは、良いも悪いも自分を認めてあげること。社会化っていうのは、人とのつながりをもつこと。困ったときに、誰にも助けを求められないのは苦しい。親も、友達も、学校の先生も、みんなが困っていたら力になりたいって思ってるよ。」と生徒には説明した。内容に嘘はないが、教えている自分自身ができていないんじゃないか、と思う。これを機に自分を振り返ってみる。

小学生の頃、おとなしく本を読んでいるようなタイプだった。学年が上がっていくにつれ、友達も増え、その中でも上位グループ（運動や勉強がよくできる集団）に属していたと思うようになった。努力のおかげで先生にも親にもよく褒められたが、そのせいで失敗や怒られることを極端に恐れるようになってしまった。

中学生になると、クラス役員の中でも目立つポジションをキープした。高校受験は地元の進学校を選んだが、合格ラインに余裕はなく必死に勉強しないとイケなかった。がんばった甲斐あって合格を勝ち取った。親の喜ぶ顔が嬉しくて、自分でも頑張ればできる、そう思った。しかし、高校での勉強はついていけなかった。

たなスタートを切ることができた。トイレ掃除の言葉に「きれいを広げる」という言葉があるが、今まさしく西尾ではきれいが広がっている。僕は今、豊田市の高校で常勤として働いている。非常勤のころより格段に忙しくなったが、生徒や保護者、他の先生と接する機会も格段に多くなった。何か自分の意見を話すとき、教育に対する思いや自分自身のことを聞かれたとき、思い出すのは今続いているトイレ掃除の活動である。トイレは使うときと掃除をするときで視線が全然違う。使う側の視線では一見きれいでも、腰を下ろし、掃除する側になるとたくさん汚れに気づく。教師という職業は特に、この視線の切り替えがとても大切だと思っている。教師の視線では気づかない問題でも、生徒の視線、保護者の視線、地域の視線、立場を変えて見てみないと気づけない問題が数多くある。

トイレ掃除は夏は暑いし冬は寒い。臭い汚い。けれどみんなで掃除をすると、協力し合う気持ちや変化に気づく力、諦めずに試行錯誤することの大切さ、僕の知らない様々なことを教えてくれる。高校生のころは受験勉強から目を背ける一心で行っていたトイレ掃除が、社会人になった今では自分のルーツを再確認し、また頑張るためのいい休憩所になっている。仕事がうまくいかずに悩んだとき、将来の不安に押しつぶされそうになったとき、仲間たちと協力して一つのトイレ掃除をしようと、心に余裕ができる。明日からまた一歩踏み出せる。高校生のころと比べても、僕はまだ自分が一人前になったとは思っていない。しかし、一緒に掃除する仲間には本当にみんな輝いている。みんなの「真面目」や「ていねい」がとてもかっこいい。だから、トイレ掃除を通じて僕もみんなと同じように輝き、かっこよくありたいと強く思う。